

最良の読者

石井 登

土岐恒二先生が書かれた数多の論文、評論、解題などを読み返してみると、その根本的な原理とでもいうか、理念として、最良の読者とはいかなるものかを示さんと欲する意思を読み取ることができるように思われる。奇しくも先の『迷宮』10号の巻頭言で野谷文昭先生が示された通り、ボルヘスの良き読者たらんと欲しておられた土岐先生が、その最晩年までボルヘス会で活動されていたのには、このような理由があったからではないだろうか。英米文学を専門とし、ウィリアム・ブレイク、エズラ・パウンド、ジョセフ・コンラッドらの研究や翻訳を発表し、スーザン・ソントグやエドモンド・ウィルソンの評論についての紹介や論考を世に問うていた土岐先生が、同時にさらに言語の垣根を超えて、ラテンアメリカの作家であるボルヘスの他、フリオ・コルタサルやマヌエル・ムヒカ＝ライネスの作品の紹介を行い、さらにはドイツのルー・サラメについての書物さえもが、その仕事の中に入っている。成された仕事の見録だけでも驚くべき内容であるが、書かれたものから読むことができる、広範に渡る射程を見るに、知の探求者として数多の書物を渉猟する貪欲にして理想的な読者としてのひとつの姿を見いだすことができるだろう。

土岐先生の研究姿勢、あるいは最良の読者としての姿勢の表明とも取ることができる重要な文章は、雑誌『海』の1970年7月号に発表された、「明晰な錯綜 ボルヘスの虚構の構造」という論考の中に見つけることができる。土岐先生は次のように述べている。

いまさらいうまでもなく、文学の批評においては、いかなる作家のいかなる作品を対象とする場合でもつねに作品経験が分析に先行すべきであり、作品の世界の構造を読み解き図式化して能事おわれりとすることはできないが、対象とする作品が例えばボルヘスのそれのように、ほとんど作者の個人的な肉声をとどめず、

その虚構の世界の時間と空間が運命的な構図のなかに封じ込められているような場合には、読者は感性による経験を拒まれており、読むという行為がそのまま作品の世界の構造の認識と直結している。[中略]したがって、ボルヘスの文学を論じようとするならば、この認識を明確にすることから始めなければならない。

まず、このように、ボルヘスを批評せんと欲する読者としてボルヘスの作品の読みの前提を提示する。そして次にボルヘスの作品の特徴を明示し、洞察力の重要性を説く。

ボルヘスの文章は、文体的には一見したところ簡潔と明瞭を特徴とするかに見えながら、しばしば晦渋な暗喩を構成するために、窮極的には決して明快なものではなく、また、本文中にさりげなく鑿められたり、騙し絵のように嵌めこまれた多数の引用句や言及、暗示、剽窃、改竄、パロディなどが、読むという行為の進行を阻み、読者の認識に挑戦している。それゆえ、ボルヘスの文体、あるいはそうした文体を支えている虚構の構造の洞察なくして、彼の文学の十全な認識はありえない。

土岐先生はそれから、この「虚構の構造の洞察」のない、「物語の表面的な読み」ではボルヘスの作品の「背後の深々と広がっている形而上的世界を見すぞすことになる」だろうと指摘し、さらに、「たとえそれを漠然と感じたとしても、その予感決して明確な認識へと収斂せず、なにか大きな謎を前にしたときのようにいたずらに拡散するばかりだろう」と続けている。この後、土岐先生はボルヘスの「作品」という言葉を「暗喩」の意味と了解するという発言を頼りに、ボルヘスの『古代ゲルマン文学論』や先生の訳書でもある『永遠の歴史』を引き、しばしばボルヘス会の読詩会でも話題となっていた、「その晦渋さにかけては文学史上類例がないとさえいわれる」ケニングという修辞法をその読みの基礎にして、ボルヘスを虚構の構造を解説していく。その後の広範な知の饗宴とも呼べるような論考へ立ち入るのはここでは避けるが、筆者はこの土岐先生の45年前の論考のはじめの数十行に、先生の研究姿勢の立脚点を見る。表面的な

読みを排し、作品の背後に広がる広大な世界を読み解くことを希求する最良の読者の姿である。

先に挙げた通り、土岐先生の研究対象はボルヘスのみならず、広範に渡っているが、多くの論考で、土岐先生は読者としての立ち位置を確認しながら、その論を進めている。例えば、1983年6月の『英語青年』（別冊）に発表された「ジョイスと David Jones」において、次のように述べている。

客観的評価なるものはぼくごときの手に負えることではなく、博搜の文学史家の手に委ねるしかないのだが、ただジョイスの『フェイネガンズ・ウェイク』ですら読解というか解読の作業が進められ、その現在までの成果が、日本語でジョイスを読むものにジョイスの巨大な像を視野におさめるための重要な情報となっている今日、David Jones の作品も、もっと読まれ、紹介されるに価するのではないかとぼくには思われる。とにかく読んで（努力して読み解いてみて）面白いのである。

この引用の最後の文の（努力して読み解いてみて）という部分に土岐先生の読みの悦びの一端を見ることができよう。少々大袈裟かもしれないが、登山家にとっての未踏峰を踏破することの悦び、あるいは兵士にとっての難攻不落の城を落とすことの悦びのように、われわれ読者（もちろんすべての読者であるとは限らないが、少なくともボルヘスを読む読者はその傾向を持っていると思われる）には、世間で難解な書と呼ばれるものを解読することは、一種の冒険に似た悦びを得るようなものである。この文で最良の読者、土岐先生は自身の読者をいわゆる読みの冒険へと誘っているように筆者には思われる。

米国の批評家エドムンド・ウィルソンの『アクセルの城』の訳者、土岐先生は『海』1972年9月号に「エドムンド・ウィルソンの批評」という評論についての評論という内容の論文を発表している。この論文は土岐先生の評論への関心の位置を知る上でも重要であるように思われる。『ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス』という書評新聞に載ったこの批評家について書かれた文を読んで、土岐先生は「いかにもアメリカ随

一の読書家といわれる批評家らしい、そして読む者の衿を正さしめずにはおかない、晩年のウィルソン」と評している。この米国随一の読書家の批評が、残念ながらわが国では正当な評価を受けていないことを嘆きつつ、先生は読みの姿勢について論じている。

「テキストの精読——それがウィルソンの批評のアルファでありオメガである。」と捉え、そのプルースト論やジョイス論を読んで、「作家像への肉薄という彼本来の意図よりも、作品の内部に潜入して言葉そのものにじっと耳を澄ましている理想的な小説読者としてのウィルソンの姿の方が強く印象に残るはずだ」と指摘する。土岐先生が思い描く「理想的な小説読者」とは、「作品の内部に潜入して言葉そのものにじっと耳を澄ましている」読者なのだ。これはもちろん、作家の自伝や評伝、作品の批評などのサブテキストの重要性を排除しているわけではない。作家ではなく作品を理解するには先に挙げた「虚構の構造の洞察」が必要であり、そのためには「引用や言及、暗示、剽窃、改竄、パロディ」を理解する知識を獲得しなければならない。それらの全知識を導入して、言葉に耳を澄ますことなのである。

作品理解のための読みとして、土岐先生は作者の紀行文を挙げている。1995 年 8 月の『英語青年』に土岐先生は「現実の地勢から魂の眺望へ——紀行文学私記——」というエッセイを発表している。この中で先生は次のように述べている。

作品理解を深めるために作者の手になる紀行文ないしは地誌を読むとはいっても、しかしながら、つきつめて考えてみると、私の場合、作品の地誌的要素をできるかぎり作者の意図に近いかたちで受容したいという素朴な願望を出発点にしているように思われる。ある作品を読むのに、その作品の背景となった土地に関する作者自身による紀行文ないし地誌があれば、それを読む。直接符合する記述があればいうことはないが、なくてもなにかしら関わりがあるパラグラフかセンテンスを参照する。なければ作品そのものの地誌的表現を紀行文的に読む。そのためには、作品を現地で読むのがいちばんいい。

ある作品を読むための読書の理想について、優しく語りかける土岐先生の姿が浮かぶ。

このエッセイでは、他にも私たちの知る先生の人柄が偲ばれる文が見られる。

残念ながら、いまの私は上記（旅行記文学論）のような旅行記の概念のそれぞれの方面に対する関心はもちあわせていても、読書量といい知識といい到底なんらかの意味ある説をなすだけの準備も力もない。そのうえ現下の私の関心は、文学者の著した旅行記または地誌を、当の文学者の主たる作品を理解するための、補助手段、あるいは手がかりとすること、さらにいえば、作品そのものをすら、地誌として、旅行記として、読むことの楽しみに傾いているのである。

論を提示するよりも、読むことの楽しみを優先したいと土岐先生流の謙遜とともに語りかけている。このエッセイは何か、純粹に読むことを愛し、詩を愛し、旅を愛した先生の人生の一つの結晶のような作品であるように、筆者には思われる。読むことを楽しむという根本的な喜びを私たちに提示しているこの作品は、先生が愛した作家たちの魂の眺望を描くと同時に土岐先生の魂の眺望でもあるのではないだろうか。それは私たちが知る最良の読者の魂の到達点からの眺めでもある。